

キャラクター名
志宮 鋼蘭(しぐ はから)

プレイヤー名

シンドローム	ブラックドッグ		ワークス	UGNエージェントD	カヴァー	UGNエージェント
	ブラックドッグ					
オプション			年齢	22歳	性別	男
覚醒	生誕	衝動	闘争	初期侵食率	50 %	
出自	天涯孤独	経験	技術畑	邂逅	師匠：冷沖 面成(さおき めな)	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	30
肉体	4	0	0			4	行動値	6
感覚	2	0	0			2	(非装備時)	6
精神	2	0	0			2	戦闘移動	11
社会	0	1	0			1	全力移動	22

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵	10	12	射撃			RC	1		交渉	1	
回避			知覚	1		意志			調達	1	
運転:			芸術:			知識:機械操作	1		情報: UGN	1	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
“鋼腕”	白兵	5r+22	8	+25		D : rDa-10(邪毒除く)

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
リサーチャズジャケット [5]		5	-2	0	<知覚><知識:~>Ach+3
* アーマースキン		4	0	0	rDa前[1/scene].rDa-1D IAp.108

所持品	
コネ：情報収集チーム★	
EM/一般：エヴリシングデイ [30]	
カスタム(武器)：ネームド [0]	
一般：バトルマニューバ	
一般：特殊装甲義肢 [Free]	

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
34.機械化兵 (基本+5%)	P 幸福感	N 偏愛		
11.秘密兵器 (基本+5%)	P 幸福感	N 偏愛		
PUJ 冷沖 面成(さおき めな)	P 尊敬	N 食傷		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
	P	N		
最大財産P:	4	残り財産P:	2	

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
ハードワイヤード	7	(+4)	常時				-	
効果： “アーマースキン”バトルマニューバ*6”常備化								
サイバーアーム	7	(+3)	常時				-	
効果： Change. “素手”[0/*2+5/5]								
磁力結界	5	3	ガード		自身	自動	-	
効果： G+[Lv]D								
マグネットフォース	★	2	DaR前		自身	自動	-	
効果： 行動権無視のカバーリングを行う								
シークレットポケット	1	-	常時			(知覚)	-	
効果： 身体にその他itemをLv個隠す								
タッピング&オンエア	★	1	メジャー	視界	電波	(知覚)	-	
効果： 傍受,放送による情報の送受信								
電子使い	★	-	メジャー		自身	(RC)	-	
効果： 電磁記録媒体の読み取り&書き込み								
電波障害	★	-	メジャー	視界	シーン	(RC)	-	
効果： 電波攪乱で無線通信,レダ-無効化								
効果：								
効果：								
効果：								
効果：								

UGNに出生してまもなく両親を失い、身寄りもなくUGNチルドレンとして育てられる。出生当初からブラックドッグに覚醒している状態であり、幼くして手に触れた機器を容易く扱う程に“慣れ”が早く、その才能は技術畑として猛威を振るっていた。しかし、20歳を迎えたばかりのときある日、体内に機械をそのまま埋め込めば全身丸ごと戦闘兵器(サイボーグ)になれるのではないかと思いつく。その瞬間、突如闘争衝動が目覚め、狂気のままにそれを一晩で実行に移す。真夜中研究室に入り込み、“自身”で施術機器を動かし、“自身”で肉体を脳との神経から断絶し、“自身”で機械を頭部に接続した。翌朝UGN関係者がこの事実を目の当たりにし、その狂気的な行動と実行力に彼は『Madder』と称された。衝動が解けても彼は自身のしたことに悔恨の念は一切なく、その後は彼の要望通り戦闘員に止む無く配属された。戦闘員となってからの教育者の選出は誰もが敬遠するかと思われたが、技術畑のときから彼を担当していた冷沖 面成(邂逅欄参照)が名乗り出た。彼の闘争衝動を同情とまではいかなくも理解しており、戦闘員に対する意欲を認め彼の今後を全力でサポートする決意を固める。